

〔民衆憲章序論（一）〕

非物質的労働とマルチチュードの不思議

——ネグリ、ハートのネガ・ポジ反転論を批判する
武藤一羊

国家権力奪取でない「決め手」——前稿を受けて

本誌四二号、四三号に書いた文章「1」の中で、私は、グローバル資本主義を乗り越えて「もう一つの世界」を生成させるためには、どのようなもう一つの世界か、また誰が、どのようにしてそれをもたらすかを主題に据えて検討しなければならぬと問い、その問いに答えるためには民衆連合と民衆憲章という契機がカギを握るだろうとし、それらについてあらためて論じると述べた。それを少し詳しく論じてみたい。

これを書いている現在、グローバル資本主義の破綻は一日と深まり、大量失業と生活の危機が急速に進行し、若い世代を中心に、いたるところで抵抗と抗議の行動が起こっている。この行動は、ますますグローバル資本主義の体制自身へと向けられていくであろう。

グローバル資本主義を廃棄し、もう一つの世界を創造す

るといふ大きい歴史的命題がふたたび表層に出現しているのである。このような状況にあつては、かつては「だから社会主義を！」という声があがったであろう。だが今日、資本主義のオルタナティブが社会主義であると言いきる人は少ない。社会主義ではないとすれば、それはいったいどこか。危機の中で私たちは、具体的な当面の行動方針を発見しなければならぬが、同時に「もう一つの世界」に目鼻立ちを与える、抽象度の次元を異にする議論を切実に必要とする時代に入ったのである。

前稿で私は、いま始まっているのはグローバル資本主義の変革運動の第二波であると主張した。第一波は、言うまでもなく世界社会主義・共産主義運動であった。一九二〇世紀に出現し、実体化し、発展し、部分的に勝利し、世界状況の有力な規定力となるとともに、勝利が抑圧と腐敗と敗北を準備するような仕方で開催し、ついに一挙に崩壊した大きいグローバルな運動を反資本主義運動の第一波

と呼び、その第一波の敗北のあと、今日私たちが推進しているのはその第二波とみなすべきであると述べた。この第一波と第二波という把握の仕方には当然異論がありうる。そこには第一波からの何らかの継承関係が含意されるからである。それについてここでは詳しく立ち入らない。ただ第二波という捉え方は、今日の反資本主義運動が、第一波の歴史的運動としての承認とそれに倍する根底的に批判的な総括をくぐる必要があることを意味している。あれはもともと間違つたダメなものだったとして、ひとまとめに肩かごに放り込むことではすまないという立場である。同じ過ちを繰り返さないためには、継承関係をはっきりさせることが必要なのである。他方、第一波は大きい欠陥があった——民主主義と人権、ジェンダー、環境などへの配慮を欠いていたなど——ことは認めなければならないが、それを補正し、パラダイムを修正すれば復興しようという姿勢を拒否することを意味する。

この第二波は、きわめて大きい波長と振幅を備え、その内部にあらゆる異質な要素を抱えた巨大な歴史的動きとしてイメージできよう。前回私は、この第二波の始まりを、ウオラステインたちの一九六八年画期説「2」に示唆を受けつつ、六〇年代後半の全世界的同時性を示すラディカルな社会運動の高揚に求めた。ウオラステインらによれば、一九六八年は、一八四八年がロシア革命から始まる本

舞台へのリハーサルであったように、新しい社会革命へのリハーサルであったという。一八四八年革命は敗北したが、運動はそこから教訓を引き出した。国家権力を奪取しなければならぬという教訓である。この教訓は一九一七年のロシア革命に始まる本舞台で生かされ、社会主義運動は二〇世紀のなかで国家として現実の存在となったという筋書きである。ここでのキーワード、もしくは運動の勝利か否かの決め手は、国家を取ること、国家権力の奪取であった。そしてこの国家の奪取を万能の手段とする社会変革という道筋こそがこの第一波の運動の落とし穴であった。

私はこの仮説におおむね同意している。おおむねというのは、この六八年期がどのように構成された歴史的時期だったかはもう少し仔細な検討が必要だと思ふからである。それを欧米と日本に典型的に見られた「新しい社会運動」の噴出で特徴づけるだけでは先進国主義のそしりを免れないであろう。何よりこの時期の同時代性である「世界は変えられる」という強烈な感覚を先導したのは、アメリカに一步も引かずに立ち向かうベトナム人民の闘いであったが、この闘いは古典的な国民国家獲得のための闘いだったのである。他方、中国の文革は獲得された社会主義権力への造反という性格を帯びていた。それらを含めて、この時期を特徴づけるのは、異質における統一（unity・heterogeneity）とでもいふべき独特の歴史性に彩られた

同時代性であった。その激動の一時期をくぐる中から、何が後戻りできない形で変わったのである。それゆえ第二波の起源と生成の方は、一連のプロセスの複合として分析する作業がもうひとつ必要なのであるが、第一波の崩壊の方は、この時期がその始まりであったことは疑いない。後にウオラスティンは、八九年——ベルリンの壁の崩壊——を六八年の延長としてとらえているが、第一波の解体のプロセスは、一九八九年のベルリンの壁の崩壊から一九九一年のソ連の解体にいたる二年間で最終的な終結に到達したのである。それによって資本主義は外部を持たないグローバルな支配システムとして復権し、冷戦期に二つの帝国——アメリカ帝国とソ連帝国——によって引き裂かれていた世界は、後者の崩壊によってひとつの資本の帝国に統合された。

今日のグローバルな資本主義を廃絶する社会変革の運動はこうして全面的に出現したグローバルな権力システムとの闘いである。この闘いが、破産した第一波の戦略、すなわち国家権力の奪取という展望の上に立てられないことは明白であろう。だが国家権力の奪取を決め手としない社会変革が果たして可能か。いや国家権力だけでなく「権力を取らずに社会を変える」³「展望を開くことができるだろうか。これは第二波にとってカナメの問いである。

世界のなかで、運動者たちの間に「もう一つの世界」への関心を高め、元氣を与えてくれるかもしれない。そして私の問題関心は、ネグリたちの関心とかなり大きく重なり合うものでもある。ネットワーク権力としての〈帝国〉の概念も、私が一九八九年以来「グローバルな複合的権力」として語ってきたものと大きく一致する（ただしネグリたちが、〈帝国〉を戦後世界におけるアメリカ合衆国の役割とかなり無理に切り離そうとすることには同意できないのだが）。ネグリたちが繰り広げる世界像は華麗で魅力的であるし、議論にはいくつもの鋭い洞察も含まれている。しかし、私は、彼らによって描き出された世界的変革の根拠や見直し全体については、まったく同意できない。前回の文章で私は、不同意である点を一部述べたが、民衆連合と民衆憲章という私自身の考えを定位するためにも、このネグリたちの見直しへの批判点、とくに『マルチチュード』に展開された議論にかみ合ってみよう⁵。

非物質的労働

まず指摘すべきことは、ネグリたちの展望が、今日の世界のなかに〈共〉⁴「ザ・コモン」としての「もう一つの世界」がすべてネガとして成熟しているという把握の上に立てられていることだ。あるべき未来はそれをただ反転させ、ネ

「大きな物語」の復権

それを論じるために、ここではアントニオ・ネグリとマイケル・ハートが、『帝国』と『マルチチュード』⁴で展開した議論をいわば「反面教師」として取り上げてみよう。ネグリたちの著作が、この問いへの正面からの代表的な挑戦であることは誰しも認めるところだろう。第一波の反資本主義運動の破産のなかで「大きな物語」一般が信用を失墜し、失われていたなかで、新しい「大きな物語」は存在しうるのか、いやそれは必要なかという問いは、こしはらく潜在していた。「大きな物語」は、フランシス・フクヤマの「歴史の終焉」が典型的であるように、資本と帝国の側に独占されていたのである。その状況の中で、ネグリたちはこの独占を破り、反資本主義運動の大きい物語のスペースを確保したのである。彼らは〈帝国〉、〈マルチチュード〉、〈共〉という三つの大テーマを取り上げ、およそこれ以上は考えられぬほど大きな物語を提起した。ネグリたちの議論が、冷戦後のアメリカ帝国の世界再編成のプロセスと世界社会フォーラムなどグローバルな社会運動の出現という状況の新展開のなかで、賛否を含めて衝撃をもって受け止められたことは不思議ではなかった。

この意味で私は彼らに大きい敬意を払う。ネグリたちの提起の壮大さと野放図な楽天主義とは、閉塞感に満ちた世ガをボジに転化すればよいのだ。私の根本的な異議はこの根拠の薄い楽天性とそれを導く概念構成の恣意性にたいしてのものである。私も一般的な意味では、成熟しつつある現実、そこから生じている運動的実践のなかに、次の社会が準備されているという立場に立っている。しかしそれがネグリたちのように反転を待つばかりの出来合いの形で与えられているとは考えられない。そのような考えはむしろ古い教条マルクス主義の図式、生産力主義の図式を想起させさえするのである。

しかしむしろ議論は今日の世界、すなわち「ポスト近代」の世界について立てられている。そこにおけるネグリたちの議論の核心にある概念は、非物質的労働、非物質的生産というものである。「今日の資本主義生産は一連の移行——すなわち、産業労働のヘゲモニーから非物質的労働のヘゲモニーへ、フォーダイズムからポストフォーダイズムへ、近代からポスト近代へ——の移行によって特徴づけられるようになったというのである（『マルチチュード』上、二二六ページ。以下、『マルチチュード』はMと略記）。『帝国』と『マルチチュード』の二つの著書に共通している不思議な点は、今日の状況として描かれる世界の様態が、歴史的なプロセスで発生したのか——「帝国」はいついかなる歴史的「非物質的労働」はいつごろから支配的になったのかなど——に

ついでいつさい明確な説明がなされていないことにあるのだが「6」、この点は不問に付すとしよう。

ともかく、世界は比較的最近、近代からポスト近代に移行した「7」。そしてかつては工業生産・工業労働が他のあらゆる生産・労働形態を自己の特徴と合致するよう変形しつつ、主導的地位を占めていたが、いまや、そのヘゲモニックな立場に非物質的生産・労働が立つようになったと言っているのである。「量的な意味では支配的でないものの、今や非物質的労働は他のあらゆる労働形態を自己の特徴と合致するように変形しつつ、それらにひとつの傾向を押しつけるようになっており、その意味でそれは主導的立場を獲得するにいたった」（M上、二三五ページ）。

非物質的労働とは具体的にはどういふものか。『マルチチュード』ではそれは「生産物が物質でない労働」であって、二種類の労働を含んでいるという。（1）知識や情報、コミュニケーション、関係性、情緒的反応といった非物質的生産物を創り出す労働（サービス労働、知的労働、認知労働など）、（2）情動労働（精神と物質双方に等しく関係する、安心感、幸福感、満足、幸福、生み出し操作する…弁護士補助員、フライトアテンダント、ファーストフード店員など）（M上、一八五ページ）。こうした異種の労働——広告代理店のコピーライターからマクドナルドの店員まで——を一括して論じることがどうしてできるのだろうか。

非物質的生産のパラダイムのもっとも重要な側面は、非物質的生産と協働・共同作業・コミュニケーションとの密接な関係——端的に言えば非物質的生産の基盤が〈共〉にあるということだ。マルクスの主張によれば、歴史的に見た資本の最大の進歩的要素の一つは、大勢の労働者を協働的な生産関係のなかで組織することだという。たとえば資本家は労働者を工場に集め、互いに協働しコミュニケーションし合いながら生産に携わるよう指示し、そのための手段を与える。これに対して非物質的生産のパラダイムでは、労働そのものが、生産のための相互作用やコミュニケーション、協働を直接生み出す傾向がある。情動労働は常に直接的に関係性を構築する。…：…そして言語の生産は、自然言語であれ、コンピュータ言語や様々な種類のコードなどの人工言語であれ、常に協働的であり、常に新たな協働作業の手順を創り出す（M上、二四三―三四ページ）。

このような認識は、非物質的労働におけるもうひとつのキーワードとしてのネットワークと連動している。「一般に、非物質的労働の主導権のもとにある生産組織は、組み立てライン特有の直線的な関係性から、分散型ネットワーク特有の無数の不確定な関係性へと変化」し、そこでは「情報、コミュニケーション、協働が生産の基準となり、

か。ましてやそれらのヘゲモニーについて語ることなどはこの奇妙な括りは、関係性と社会的生そのものを直接に創り出す労働としての非物質的労働形態——生政治的労働という前提的把握から生じるのである。これはネグリたちの議論の核心にある考えに違いなく、『マルチチュード』全編を通じて繰り返し、主張されている。

「物質的生産——たとえば車やテレビ、衣服、食料品などの生産——は社会的な生活手段を作り出す。それに対して非物質的生産——アイデア、イメージ、知識、コミュニケーション、協働、情動的関係などの生産——は社会的な生活手段ではなく、おおむね社会的な生そのものを作り出す。非物質的生産は生政治的なものだ」（M上、二四二ページ）。

非物質的労働というものをこのように抽出できるかどうかは疑わしい。生産システムの設計はたしかにそれ自身非物質的労働であろうが、その生産物が「社会的生」でないことは明瞭だ。設計が生み出すであろう機械システムはモノであり、その機械システムは概してモノを生産する。

だが非物質的労働のあいまいさは脇に置き、その創り出すものが関係性と社会的生であるという命題をかりに受け入れるとしよう。ネグリたちによれば、そのような非物質的労働のつくりだすのは直接に〈共〉の関係だという。

ネットワークが組織の支配的形態となる」という。「非物質的生産のパラダイムが指図する、協働的で活発にコミュニケーションし合う関係性の組織形態」がネットワークであり、「このようにネットワークという共通形態が現れ、主導権を行使するという傾向こそ、この時代を定義づけている」と著者たちは言う。「私たちが世界を理解し、そのなかで行動する方法を規定する共通の形態がネットワークになった」とも言う（M上、二三七ページ）。物質的生産においては「規律・訓練」の下にあった協働は、非物質的生産では横の結びつきとしてのネットワークを通じるコミュニケーションとなる。

そしてそのような非物質的生産が主導的になるとき、それに携わる労働は直接〈共〉を体現する。なぜなら「生産における協働の中心的な形態は、もはや労働の組織化プロジェクトの一环として資本家によって作り出されるのではなく、労働そのものの生産的エネルギーから現れ出てくる」からだという。こうして「非物質的労働の主導権のもとでは、〈共〉的な関係や〈共〉的な社会関係がかつてないほど顕著な形で創り出される」。そして「このように非物質的生産において協働の創出は労働の内側にあり、したがって資本の外側にあるものとなったのである」と（M上、二四四ページ）。

冗談じゃないよ、と言いたくなる。かりに「非物質的

労働」が「直接関係性」を構築する活動だとするとしても、今日支配的な事態は、資本が利潤の新しい源泉としてそれを活動の内部に統合したことを意味するだけではないか。協働、コミュニケーション、関係性の創出などはこれまでも（物質的生産においても）資本の内部で行われてきたが、いまではかつて外部に置かれていた部分の多くも資本の活動に合体されたのだ。介護から外食産業、教育から娯楽まで、非物質的生産らしきものが、コスト・ベネフィット原則の支配の下で効率性の追求に追い立てられているとき、「協働の創出は労働の内側にあり、したがって資本の外側にある」などと何を根拠に主張しているのだろうか。

この議論の無意味さは、理論の問題というより現実を見ればわかるだろう。ネグリたちの言う非物質的労働に携わる人びとには、定義からして証券トレーダーから清掃労働者、大学教師から給食サービスの女性労働者まで、ごつたに含まれるのだ。そしてそれぞれの特異性を保持しつつネットワークとして結びつくことで〈共〉を作り出すというわけだ。この議論の中で用いられている労働 (Labor) という言葉は、労働そのものと労働者の双方を表わしうるし、表わしているが、これだけ違う具体的労働は、その担い手とともに、実際は、横並びのネットワークなどではなくて、資本が指定する複雑な上下関係と無慈悲な相互競争の中に結び付けられているのではないか。いや逆に、物質

非物質的労働の主導権のもとにある搾取とは、もはや、個別的または集団的な労働時間で測られるような価値の収奪のことではなく、協働的な労働によつて生産され、社会的ネットワークのなかで流通することを通じてますます、〈共〉になつていくような価値の捕獲を指す。……非物質的労働の主導権のもとでは、〈共〉的な関係や〈共〉的な社会関係がかつてないほど顕著な形で創り出される

(M上、一九二―九三ページ)。

資本は、すでに〈共〉として作り出されている価値を事後的に「捕獲」するのである。非物質的労働は資本の支配を受けることなく〈共〉をつくりだして、資本はそうして生産される価値をただ外からパクるだけなのである。

ネグリたちは、情報・コミュニケーションが生産の基準となり、生産の技術的システムがその社会的編成と密接に対応するようになる、という言い方をしている。そしてそれが労働の「新たな位相」を定義する。非物質的労働が主導権を握ることで、労働条件は変化し、「仕事時間と余暇時間との区別がどんどん曖昧になり、従来の労働日という概念が変質する。工業労働のパラダイムでは、労働者が生産するのはもっぱら工場での労働時間に限られていた。しかし生産の目的が問題の解決やアイデアまたは関係性の創出ということになると、労働時間は生活時間全体にまで拡大

的か非物質的かを問わずこうした労働のさまざまなそしておびただしい特異なポジションそのものが、資本間の激的な競争のただなかで、資本の蓄積と搾取の最大化を目指して、創出され、増殖させられているのではないか。ネグリたちが非物質的と呼ぶものに含まれるある種の労働が、情報化の爆発的發展によつて重要性を増していること、そしてどのような「もう一つの世界」を構想するにせよ、それが重要な新しい社会的成分であることは確かである。だがそうした労働を含めて途方もなく広い範囲の異質な具体的労働を非物質的労働として一括して論じ、非物質的労働が直接的に〈共〉を生産する労働であるなどと価値付与するのはあまりにも乱暴で、根拠を欠く。だいいちそれは私たちの日々目にする現実とはあまりにもかけ離れている、ましてやこの〈共〉の生産が資本の外側に営まれるとは！非物質的労働というこの不確かなものを理論的な組み立ての基礎に置くことが、ネグリたちの議論全体を掘り崩しているのである。それは現実の分析を反映するというより、単純な反転による〈共〉の生成モデルへの思弁的要請によつて逆導出された概念としか思えないのである。

しかし、もう少し非物質的労働というものを追跡してみよう。そこでは労働時間はもはや尺度ではなくなるそうである。こう言われている。

する傾向がある。アイデアやイメージはオフィスの机に座っているときばかりでなく、シャワーを浴びたり、夢をみているときにもふと訪れるものだからだ」(M上、一九〇ページ)。

こういう議論を聞かされると複雑な思いにとらわれる。一方では、自由時間とたっぷりしたスペースと高給を与えられる創造的なシステム開発に従事しているとされるテクノエリートが浮かぶ(とところで私の知り合いにはそうした労働にたずさわる人はいないのだが)。他方では、裁量労働時間とか働き方の自由選択などと口当たりのいいスローガンの下、ノルマと期限に追われ、サービス残業を強いられる、過労死に追い込まれるソフト開発労働者の姿が見える(こちらの方はいくらでも身近にいる)。「労働時間が生活時間全体にまで拡大する」ことの意味が、前者と後者ではまったく異なっていることは自明である。前者は、たとえばアメリカ合州国の場合、労働者数の四割を占めるけれど、その収入は全被雇用者の収入の五一割を占める「エリート知識労働者」である「き」。この二つの像を合成して作られる非物質的労働の概念とはいったい何なのか。

ともあれネグリたちの議論では、〈共〉的な関係を直接に生産する非物質的労働に未来へのカギが託されている。しかし非物質的労働は世界社会においては少数派である。非物質的労働が今や主導的な立場を獲得しつつあると主張す

るとき、私たちは何も世界の労働者の大半が主として非物質的な財を生産していると言っているわけではない。それほどころか、農業労働はこれまで何世紀にわたってそうであったように、今も量的な意味では優位を占めているし、工業労働も地球全体としては減っていない。非物質的労働は地球全体の労働からするとあくまで少数派であり、それが行われる場所も地球上の支配的な地域に集中している」(M上、一六八ページ)のである。だが、前に引用したように、ネグリたちは、それが「量的な意味では支配的でないものの、他のあらゆる労働形態を自己の特徴と合致するよう変形しつつ、それらにひとつの傾向を押しつける」ことで「主導的立場を獲得」したと主張するのである(M上、二三五ページ)。

だが具体的に、この非物質的労働はどのように他のあらゆる労働形態へのヘゲモニーを行使しているのか。『マルチチュード』では四つの「証拠」が挙げられている。(1) 支配諸国の雇用で、もともと急速に増えている職業——飲食サービスのスタッフ、販売員、コンピュータエンジニア、教師、医療従事者など——の大部分で非物質的労働が中心的役割を占めるようになり、工業、農業など物質的生産形態が世界の従属地域に移転していること。(2) 他の労働と生産の形態が、非物質的生産の特徴をとりいれつつあること。コンピュータの組み込み、コミュニケーションメカ

で働くすべての人びと、したがって潜在的には資本の支配を拒否する人びとからなる階級」(M上、一八二ページ)であると言われている。社会的労働者である。そうであれば、それは世界の圧倒的多数の十億の単位の人びとのことだと言ってもいいであろう。

しかし著者たちは、その何十億の地球住民をただ指さしてマルチチュードと記述しているわけではない。前号で触れたように、それがマルチチュードと表現されるのは、人々 (people) や大衆 (masses) というあり方から区別される存在の仕方をしていると主張されるからである。その存在の仕方とは、一体化されたり (人民の場合)、均一化されたり (大衆の場合) することなく、それぞれの構成部分の特異性を保持しつつ、協働することによってそれ自身が〈共〉を創り出すような存在の仕方である。しかしそうなるのはヘゲモニーを持つ非物質的労働がマルチチュード全体に「一つの傾向を押しつけ」る、すなわち〈共〉を生成するような関係を保証するからであるとされているのである。

現に存在する数十億の世界の普通の人びとを何と呼ぶか、それは立場中立的ではありえない。私は民衆、ピープルと呼んでいるが、それはたとえば世界市民という呼び名への批判を含意している。ネグリたちがそれをマルチチュードと呼ぶことは、この数十億の人びとがひとつの主体に統一

ニズム、知識、情動が伝統的生産実践を変容させている (例えば農業における種子情報管理)。(3) 非物質的労働によって生み出される非物質的な所有形態——特許、著作権など——が重要性を強めていること。(4) 非物質的生産に特有の分散型のネットワーク形態が、神経系統からテロリスト組織にいたるすべてのものを理解する手段として社会的生のあらゆる場面に登場していること (M上、一九四〜九五ページ)。

ここに指摘されているような現象はたしかに存在している、それらは加速度的に資本主義とグローバル権力の支配様式を変容しつつある。おそらく上記に加えて、戦争の無人化まで付け加えることができよう。だがそれらははたして資本の外側に〈共〉を作り出すという非物質的労働のヘゲモニーを表わしているのか。「もう一つの世界」の創造にあたってこれらの傾向が前提として存在すること——良いにせよ悪いにせよ——は確かであるが、それがマルチチュードの〈共〉への形成とどのように関連するのだろうか。

マルチチュード

〈共〉にもとづくグローバルな自治＝絶対民主主義の主体とされているのは、マルチチュードである。だがマルチチュードとは何か。それは実体的には「資本の支配のもと

されるべきだ」という考えの拒否を表わしている。この数億、数十億の人間たち (human beings)、人びと (persons) は、それぞれ特異性を保持する人びとであり、統一や均一化に向かうのではなく、特異性を保持したままで結びつき協働して〈共〉を形成するべきだし、すでにその実質を備えていると主張することが、この数十億をマルチチュードと命名する意味である。それはネグリたちのヴィジョンであり、数十億の人びとへのネグリたちの実践的な関わり姿勢を表わすものである。

しかしそのことは、現に存在し生活する数十億が、そのようなものとして存在しているかどうかとは別の事柄である。この数十億の大多数がどこにどのような多様な生活をしていのか、どのように協働し、争い、また傷つけあい殺し合っているのか、それは思弁の問題ではなく、現実の問題である。そして現実には、国境を越え、イッシュユウを越えた社会運動や下からの抵抗の連帯の存在を示すとともに、民衆が分断され、位階的に組織され、排外主義が煽られ、衝突し合っている惨憺たる姿をも私たちに突きつけている。この引き裂かれ、競争と対立をけしめかけられている世界社会の住民たちの現状をネグリたちはどう見るのだろうか。そこに非物質的労働の主導権を読み込むことで、この現実が、特異性を保持しつつ協働する人間たち——すなわち彼らの

マルチチュードに——すでに転形していると主張しているのであらうか。あるいはそうならないとすれば、非物質的労働の主導性がまだ十分に貫徹されていないからだと論じるのだろうか。

実は、著書『マルチチュード』における著者たちの議論には、マルチチュードはたまたかの中で出現するという以外には、その自己形成プロセスについての現実的関心が欠けているのである。マルチチュードはいま存在するままで——非物質的労働の規定力の下に——すでに実体としての〈共〉を作り出していると見られているからである。これは循環論法である。定義に結論が含まれているのだ。現実存在する人びととしてのマルチチュードがどのような状態にあるかは問題ではなくて、マルチチュードは、定義により、特異性を保持しつつ〈共〉を体現するものとして与えられているのである。したがって〈共〉も定義によりマルチチュードとともに作り出されているのだ。

著書『帝国』においてはマルチチュードはもう少し実践的な姿において——「ポッセ」（活動性としての力）として——捉えられており、すべての「社会的労働者」の「構成的パワー」[9]として、みずから組織し、運営し、指揮する生政治的統一体としての生産的かつ政治的な権力を組織すると論じられている。それは「活動状態にある絶対的デモクラシー」のことである（『帝国』五〇五〜〇八ページ）。

産力が古い生産関係の桎梏を突き破る。プロレタリアートはこの新しい生産力を代表する。それが革命的な社会変革であるというものであった。ネグリたちはその定式を多少変更しつつ、マルチチュードそのものとしての新しい生産様式がすでに古い「諸条件」に対抗して出現していると論じるのだ。

反転のジモン

こうして〈共〉はマルチチュードとして存在しているがその実現は阻まれている。帝国と資本の支配の下では、情動労働、知識やアイデアの生産なども「共同で生産されたものが私有化」されてしまうからである。〈共〉であるものが私的に領有され、略取されているとし、それを〈共〉に戻す闘いとして世界変革は構想されているのだ。

だがネガをポジに変えるとは、黒を白に変えることである。そこでは黒白は反転しても凶柄は同一である。われわれは「もう一つの世界」をそのような反転像として描くことができるのだろうか。

「金融資本の二つの顔」という表題で、金融市場とデリバティブ取引について論じられている部分は注目に値する。今日の金融危機の中でこれを読むと感慨はいっそう深い。

ネグリたちによると、デリバティブ取引は、具体的経済

ジ。以下、『帝国』はEと略記。「マルチチュードとは生政治的な自己組織化のことにほかならない」ともいう（E、五〇九ページ）。その議論は当然に自己組織化の条件やプロセスを含むことになる。さらに『帝国』ではグローバル市民権の要求、社会賃金の要求が掲げられ、帝国の下で私的に領有されている〈共〉を再領有する闘いが提起されている（E、五〇四ページ）。概して『帝国』の方は今日のプロレタリアートとしての社会労働者マルチチュードのたかいたが強調されていて、実践的側面が強い。しかしここでもマルチチュードは〈共〉の関係の中にすでに存在しており、台頭する新しい生産様式として潜在しているとされているのだ。

あらゆる刷新の過程がそうであるように、台頭する生産様式は桎梏と化した諸条件に対抗しながら現われる。マルチチュードの生産様式は、労働の名のもとに搾取に対抗し、協働の名のもとに所有に対抗し、自由の名のもとに腐敗に対抗しながら現われる。マルチチュードの生産様式は、労働において身体を自己価値化し、協働をとおりして生産的知性を再領有し、自由のもとに存在を変容させるのである（E、五〇六ページ）。

古典的なマルクス主義のテーゼでは、台頭する新しい生産活動から派生した抽象度の極端に高い取引であり、「金融が国内市場とグローバル市場を調整すると同時に、経済システム全体を不安定化させている傾向」があり、新自由主義への抗議者の異議申し立ては、少数者への富の集中とならんで、そこに向けられているという。では金融市場やデリバティブ取引は切除を要する世界社会のガンのようなものなのか。

そうではないのである。金融資本にはもうひとつの顔、「未来へ向いた〈共〉の顔もある」という。「金融は実際、他の資本形態に比べていささかも生産性に劣るものではない。どんな資本形態もそうであるように、金融も貨幣によって表象される労働の蓄積にすぎない。他の形態との第一の違いは、貨幣を媒介にした高度の抽象化によって、広大な労働領域を表象できるということであり、第二の違いはそれが未来を指向しているという点にある。言い換えれば、金融資本とは、私たちにとって未来の〈共〉的産力を一般的に表象するものとして機能しているのだ。金融市場で用いられる種々の奇妙なトリック——たとえば、技術面では時差を使って異なる株式市場で投機を行うとか、実質面では年金基金を株式市場に投資して労働者の生活をリスクにさらすとか、さらに経営面では企業のCEOや役員に膨大なストックオプションを与えるといったことなどはすべて、新しい労働形態とその未来の生産性を規定し、彫琢す

る力を金融に与えるメカニズムだといえる」(M上、一五二ページ)。さらに言う。

金融資本が未来に向けられ、広大な労働領域を表象するものだとすれば、逆説的にはあれ、そのなかに出現しつつあるマルチチュードの姿を、たとえ逆転し歪んだ形であっても、見出すことができるかもしれない。未来の生産性がますます〈共〉になることと、それを統制するエリートの数が増えます少なくなることの矛盾は、金融において極限に達する。いわゆる資本の共産主義——すなわち資本が労働をいつそう広範な社会化へと駆り立てること——は、両義的にはあるがマルチチュードの共産主義を指示しているのである(M下、一五二―一五三ページ)。

金融市場を反転するとどのような〈共〉の未来が出現するのであろうか。

もうひとつ例をあげよう。巨大都市である。

ネグリたちの反転ヴィジョンでは、資本主義と近代文明全体の作り上げた構築物は基本的にそのまま引き継ぎうる財産となる。ネグリは別の書物で、「〈共〉という概念は……システムの生産性にとって必要不可欠な、さまざまな〈共〉的構築物のこと」であるとし、それは「資本主義が

おのれのものしてしまおうか、コミュニティによって直接使われることになるかのどちらかであるようなもの(こと)」だと言って、その構築物に大都市を位置づける。こう述べる。

いまや、都市は生産の源泉そのものになっている。人々の暮らしや生活のためのテリトリーとして組織された都市は、耕された土地がかつてそうであったように、生産の現場になったということなのです。

大都市の住民が世界の真の中心である、別の言い方をすれば人類学的な本質である、二一世紀の理想郷であるという傾向は、日増しに強まる一方です。たとえ社会学者(と保守系政治家)のなかに、大都市でなく町から始めなければならぬと唱える人たちがいるにしても……彼らの考えでは、町であればまだ人間らしい生活設計が可能かもしれないが、大都市では、まとまりも捉えどころもない無秩序なマスに陥るのが関の山であり、どんな秩序も維持しえないということになる。しかし、これは現代の幻想です。いまや町など存在しません。存在しているのは大都市だけ、さもなければ大都市と村だけなのです。大都市の孤独、あるいは孤高の大都市ということについて、まさにいまこそ詩人たちに語らせるべきでしょう。そして、これでいいのです。大都市とそこに住むマルチチュード万歳!ということです[10]。

グローバル・シティと呼ばれるグローバル市場に直結する都市を含めて、巨大都市がグローバル資本の世界社会支配の産物であること、巨大な消費と汚染のセンターであり、グローバル人口の多数である農民をはじめ周辺への経済的・政治的支配のセンターであることは明らかである。「もう一つの世界」を構想するなら資本主義的近代文明が生み出した巨大都市というシステムへのオルタナティブは何かと問題を立てなければならぬこともあまりにも明らかであろう。グローバルな権力は、巨大都市をグローバルな権力拠点として作り出し、いつそう巨大化する。ニューヨーク、上海、ムンバイ、東京、メキシコシティ、ロスアンジェルスなど巨大都市は、グローバル化経済の新しい超国家的経済地理において、それぞれがグローバルな権力システムの維持に不可欠な位置を占めているのは明らかである。そこには「都市問題」があるだけではなくて、「大都市という問題」が存在する。

大都市だけではない。ネグリのアプローチには、総じて「開発」(development)パラダイムを批判する視点が欠如している。すでに七〇年代からオルタナティブの議論は、開発・進歩のパラダイム批判をテコに推し進められてきた。それは環境破壊にたいする下からの運動を基礎にした近代文明への批判であった。資本主義の達成物を引き継

ぐのではなく、それに根本的な批判と反省を加える視点を導入した。その視点を欠くネグリたちのネガ・ポジの視野には、一般に環境、エコロジーの領域がうまく収まらないのである。確かに、『マルチチュード』では、先の「金融資本の二つの顔」に続けて、エコロジーに触れる節があり、インドのナルマダ・ダム反対闘争——先住民の抵抗にインド国内と国際的な支援運動が合流した——が取り上げられている[11]。「エコロジーは、生という基本問題が政治的・文化的・法的・経済的な問題と直結する領域のひとつ」(M下、一五四ページ)であり、すべての人間は地球というひとつの惑星に暮らしているので、グローバルな行動を呼びおこすとされる。だがここではエコロジーは外挿されているに過ぎず、近代・ポスト近代を通じて積み上げられてきた発展や進歩のパラダイムへの根本的な批判と転換が要求されているとはけつして考えられていないのだ。ネグリたちによれば「ナルマダ運動が提起する根本的な問題」は「ダムの社会的コストの大部分は貧者にのしかかり、利益の大部分は富者のものになる」ことにあるという。ネグリたちは、ナルマダの異議申し立ては科学技術にたいする抗議ではなく、〈共〉的な富を私的所有者(たとえばアグリビジネス)に渡すという私有化の手段への抗議であると繰り返し強調するのである。「真の問題は科学技術をいかに使いコントロールするかにある」(M下、一五三ページ)。

こうした主張は目新しくはない。科学技術中立論である。原発そのものは人類科学の成果だから、反対ではない、ただ独占資本に奉仕する政府の下では安全性の保証もないので、反対だ、民主的政権ができれば原発は推進できるといった議論をわれわれは長年耳にしてきた。近代開発パラダイムへの根本的批判を突きつけたナルマダ闘争は、ネグリたちの目には「(共)の私有化を進め、少数者を富ませて多数者の困窮をより悲惨にする決定を下す政治権力に対する抗議」としか映じないのである。

さて、ではネガからポジへの反転はどのように起るのか。われわれは「決め手」の問題に差し戻されるのである。反転へのネグリたちのヴィジョンは一挙的グローバル体制変革によるマルチチュードの自己統治(絶対的民主主義)の実現にあるようだ。それはマルチチュードの構成的権力の行使である。「世界創造が完了するとき」(E、五〇九ページ)とも宣言される。黙示録的見通しである。ネグリたちは、世界市民権の提案やグローバル王権にたいするグローバル貴族と戦術的連合を結んで獲得される「マグナカルタ」の提案などを含めて過渡的・改良的手段の提案をためらわぬのだが、いざ「決め手」はとなると、「切断と決意の時間」に行われる政治的決断ということになる。こう言う。

革命の政治学はあまたのマルチチュードの動きのなかに、

そして「(共)」と協力的決断の蓄積をとおして切断の瞬間すなわち新しい世界を創造する契機となるクリナーメン(偏倚)をとらえなければならない。そうすれば生権力による破壊的な例外状態をもとめず、民主的生政治による構成的な例外状態もまた存在することになる。「大きな政治」は常にこの瞬間、新しい構成的時間性を……創出する瞬間を求めている。新しい時間性の矢が弓から放たれたとき、新しい未来の幕が切つて落とされるのだ(M下、二六三ページ)。

新しい未来はそこに開ける。いやすでにそこにある。なぜなら「マルチチュードの構成的権力が徐々に成熟し、今やコミュニケーションと協働のネットワークや「(共)」の生産をとおしてオルタナティブな民主主義社会を独力で維持する能力をもちつつあるからである」(M下、二六二―六三ページ)。

すばらしい。この勇敢な宣言には脱帽するほかない。だがそれはむろん私にはまったく説得力を持たない。「(共)」も「もう一つの世界」は、ネガ・ポジ反転ではない現状の否定力によって、しかし現状の中に存在し、成熟しつつある社会的な力によって現状にたいして非対称に構想され、推進されるだろう。次回にはその問題に移っていこう。

(引用文中強調はすべて引用者)

【注】

- [1] 武藤一羊「帝国の没落と(もうひとつの世界)への道筋を探る」上・下、『季刊ピープルズ・プラン』四二号・四三号。
[2] 「一九八六年／大いなるリハール」G・アリギ、T・K・ホプキンス、I・ウオーラースティン、太田仁樹訳『反システム運動』、大村書店、一九九三年
[3] ジョン・ホロウエイ(大窪一志・四茂野修訳)『権力を取らずに世界を変える』同時代社、二〇〇九年
[4] アントニオ・ネグリ、マイケル・ハート(水島一憲他訳)『帝国——グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』、以文社、二〇〇三年、同著(幾島幸子訳、水島一憲・市田良彦監修)『マルチチュード——「帝国」時代の戦争と民主主義』上・下、NHKブックス、二〇〇五年。
[5] ただし私はこの二つの著作が哲学書として読まれるべきだという著者たちの勧めは退ける。ネグリの主著と位置づけられる『構成的権力』(杉浦昌昭・斎藤悦郎訳、松籟社、一九九九年)で展開されたネグリ思想の発展としてこの二著があり、ここで用いられている基本的カテゴリーはその主著で彫琢されているので、哲学書ないしは思想書として二著を批判するためには、まずこの主著の評価からかなければならないかもしれない。『構成的権力』は、たしかに「マキャヴェリからスピノザから、イギリス革命、フランス革命ならびにアメリカ革命を経て、マルクス、レーニンにいたり、さらにポストモダンに達する西洋近代の革命的な政治思想の総括」(訳者氏の後書き)と紹介されるにふさわしい密度の高い、情熱的な書物であり、私もその魅力に引かれて読みとおした。

しかし理論的背景はどうであれ『帝国』と『マルチチュード』はグローバルな運動への実践的提案として存在しているのであって、運動者はそれを実践的提案として検討する権利を有すると私は考える。私はそうしたものととしてこの二冊をいわば地上に引き下ろして検討してみた。ネグリ思想の研究は私の任でないし、別個に行われるべきだろう。だがこの二冊が哲学書ではなくて、政治的文書として読まれることに著者たちは責任を負うべき立場にあると私は考える。

[6] 私は、第二次大戦後にアメリカ帝国として帝国は成立したが、ソ連帝国と世界を分割する半分の帝国であり、ソ連崩壊によって遅まきながらグローバル帝国となったと考えている。そしてグローバルな権力はアメリカ国家を不可欠な有機的構成要素とする全体としては非公式な複合的権力として成立している。詳しくは、武藤一羊「アメリカ帝国と『グローバル化』の歴史的位相」『アメリカ帝国と戦後日本国家の解体』所収、社会評論社、二〇〇六年、参照。

[7] 「近代・ポスト近代」という定式が自明のように用いられることに私は根本的な疑問を持っている。近代からポスト近代へとか、フォーダイズムからポスト・フォーダイズムへという時代把握はしばしば置き換えを含意している。八〇年代に大量生産が多種少量生産に置き換えられ、テラー主義が労働者参加のトテイイズムに置き換えられるといった安易な主張が流行し、私はパンジヤマン・コレアやアラン・リビエツなどフランスのレギュラシオン派の八〇年代のこうしたトテイイズム礼賛論の批判を試みてきた。ネグリたちが強調する情報技術の飛躍的發展による生産と労働形態の質的な

変化が、グローバル社会の在り方全体に深い変化をもたらしつつあることは確かだが、それは大量生産・大量消費とついで代わったのではなく、その上に有機的に接ぎ木されたのである。ネグリは明らかにコレア理論に依拠しつつ、「トヨティズムは、フォーティズムによる生産と消費のあいだのコミュニケーションの構造を逆転させる」と言い、在庫ゼロとジャスト・イン・タイムとカンバン方式のモデルは「コミュニケーションと情報が生産の新しい中心的役割を演じる」ようになったことを感じさせるとしている。「非物質的労働」の中心的役割の例証と受け取られているのであろう。だがトヨティズムはテラー主義をウルトラ化したものであり、トヨタは依然として大量生産・大量消費のチャンピオンである。「ポスト近代」は近代にとって代わったのではなく、近代そのものである。

[80] Andre Gorz, *Reclaiming Work*, Polity Press, 1999, p.7

[9] 構成的パワー、構成的権力 (constituting power) はネグリ理論の核心の概念で、下から革命的に政体を作り出していくマルチチュードの力である。非物質的労働の主導性の下で形成されるマルチチュードは、みずからが特異性を保持したままネットワーク的に協働しみずから統治する社会を構成する能力があるというのが、著者たちの主張であるが、その能力によって、構成的権力は、過去の革命におけるように「構成された権力」≡主権に帰着するのではなくマルチチュードの自治が可能になると考えているようである。

[10] アントニオ・ネグリ『未来派左翼(上)』NHKブックス、二〇〇八年、六一ページ。

[11] インド北西部のナルマダ川流域の巨大開発計画は、一九八〇年代以来、立ち退きを迫られる先住民族を中心とする地元住民の激しい抵抗運動、インド全国からの支持、国際的世論の喚起と支持によって、一九九三年に世界銀行は融資を中止、日本のODAも中止に追い込まれた典型的な反開発闘争である。鷲見一夫「きらわれる援助——世銀・日本の援助とナルマダ・ダム」など多くの文献があるが、この闘争に一貫して参加してきたヴィノッド・ライナは、この闘争の持続を支えた原動力としてインドの民衆の川への深い想いと自然への畏敬の念、また先住民族の土地・自然との伝統的な関わりを挙げている。それはダムの社会的コストの負担をめぐるだけの闘いではないのだ(「自給共同体における環境と文化——人びとはなぜダムに反対するのか」『ピープルズ・プラン研究』No.5、二〇〇〇年一月)。

(むとういちしよう／ピープルズ・プラン研究所運営委員)